

ルツ記における「ヤーシャヴ」(יָשָׁב)

● ちなみに、「ヤーシャヴ」という動詞は、旧約で 1084 回と使用頻度の高い動詞です。ルツ記においては以下のように 11 回使われています。ルツ記で使われている「ヤーシャヴ」のニュアンスを以下の箇所から掴みたいと思います。

1:04 「・・・彼らがモアブの野へ行き、そこへとどまっているとき、」(新改訳)〔滞在して住みつくこと〕

2:07 「・・・ここに来て、朝から今まで休みもせず、ずっと立って働いています。」(新改訳)〔?〕

「・・・朝から今までずっと立ち通しで働いておりましたが、今、小屋で一息入れているところです。」

(新共同訳)〔座って休息すること〕

2:14 「・・・彼女が刈る者たちのそばにすわったので」(新改訳)〔座ること〕、(新共同訳)〔腰を下ろすこと〕

2:23 「・・・こうして、彼女はしゅうとめと暮らした。」(新改訳)〔生活すること〕

3:18 「・・・娘よ。このことがどうおさまのわかるまで待っていないさい。」(新改訳)〔じっと静かに待機する〕

4:01 「・・・ボアズは門のところへ上って行って、そこにすわった。」(新改訳)〔座ること〕

4:01 「・・・こちらに立ち寄って、おすわりになってください。・・・」(新改訳)〔座ること〕

4:01 「・・・彼は立ち寄ってすわった。」(新改訳)〔座ること〕

4:02 「・・・ボアズは、町の長老十人を招いて、『ここにおすわりください』と言った。」(新改訳)〔座ること〕

4:02 「・・・彼らもすわった。」(新改訳)〔座ること〕

4:04 「・・・ここにすわっている人々と私の民の長老たちとの前で・・・」(新改訳)〔座ること〕

● 「ヤーシャヴ」の本来の意味は 4 章 1~4 節に見られるように「座ること」「座すこと」です。そこから腰を下ろして休息すること、暮らす(生活する)こと、長く滞在すること、静かにじっと待機すること、といった意味合いがあることが分かります。

● 1 章 1 節では、エレメレクの家族はききんのために故郷ベツレヘムを離れ、モアブの野へ行き、そこに滞在することにしました。ここで「滞在する」と訳された動詞は「グール」(גָּוַל)で、あくまでも「一時的にそこに寄留する」という意味です。ところが、結果的には、そこに「住み続けてしまった」のです。これが「ヤーシャヴ」(יָשָׁב)の「住む、とどまる」という意味です。そこでナオミは夫のみならず、二人の息子とも死別するという苦しみを味わったのです。しかし、ルツ記のストーリーはそこから始まるのです。「夕があり、朝があった」というヘブル人特有の時間感覚を想起させる神のドラマです。モアブでの「ヤーシャヴ」はナオミにとって「苦しみそのもの」でした。ですから彼女は自分のことを「マラ」(全能者が私にひどい苦しみに会わせたという意味)と呼んでくださいと言っています。しかし嫁のルツと共に暮らして、今や神の回復(贖い)の導きを感じ取ったナオミは「じっと待っていないさい」(3:18)とルツに勧めています。これは彼女が神の御手の中に「ヤーシャヴ」したことを意味するのです。